The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代英米語の話し言葉における過去形と現在完了形の交替について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2010, 34, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99338
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代英米語の話し言葉における過去形と現在完了形の交替について

大　津　智　彦

1　導入

筆者は大津（2007）において、現在完了形の史的発達を辿るため、19世紀イギリス文学作品をコーパスとして、過去形と現在完了形が特に意味の変化なく入れ替わることができ、互いに変異形（variables）をなしていると解釈できる場合、つまり文が現在との関わり（present relevance）のある出来事を表す場合の両者の交替を調査した。そのなかで書き言葉と話し言葉とを比較すると、書き言葉において現在完了形がより浸透していることから、現在完了形の発達は書き言葉から発達したという推論を立てた。その推論を検証するために時代をさらに遡り、機能上、過去形と現在完了形の区別がなされるようになったという1600年代における両者の交替を扱ったものが大津(2009)である。この論文では1600年代のイギリス文学作品である散文と演劇を比較したが、やはり散文における現在完了形の頻度が圧倒的に高く、現在完了形は散文から広がったという推論を裏付けることができた。

上記のように現在完了形は書き言葉から浸透していき、19世紀の時点では書き言葉における頻度の方がまだまだ高い[1)]。ではその後、現代英語の状況はどうなっているのか。Vanneck（1958）は現代アメリカ英語について、書き言葉では現在完了形が、話し言葉では過去形が好まれる傾向があることを指摘している。また、Visser（1966: 754）も現代アメリカ英語の口語におい

て過去形が好まれる傾向に言及している。Denison（1998: 191）によると過去形の使用は1900年代初期までの英語に特徴的であるが、現在ではDenisonが使うイギリス英語の方言では不可能ではないにしても避けられるという。しかし、アメリカ英語では*yet*を伴う下記のような文において過去形が典型的に使われるという（Denison（1998: 192））。Denisonは書き言葉、話し言葉の区別をつけていないが、例文は疑問文であることから話し言葉を示唆している。

（1）a. *Did* you *eat* yet?
　　b. *Have* you *eaten* yet?

以上のことから、現代英語における状況について次のような課題が浮かび上がる。まず、現在完了形の浸透が書き言葉に比べ立ち遅れていた話し言葉においてそれがどれだけ進んだかということである。いずれの研究者もアメリカ英語の話し言葉で過去形が用いられる傾向を指摘しているが、Denison（1998）を除いて、40年から50年前の研究であり古く、今日では事態が変化している可能性がある。また、Denisonも典型的（“typical”）としているだけで、具体性に欠ける。よって、現時点におけるアメリカ英語の話し言葉において過去形の使用がどの程度行われているのか、逆の視点から言うと現在完了形の浸透度を明示する必要がある。同時に、上記の先行研究からはイギリス英語の話し言葉においては現在完了形が既に十分浸透していることになっているが、本当にそうなのか、それはどの程度なのかについても検証しておく必要がある。

本稿では、現代英米語の話し言葉において、過去形と現在完了形が交替可能な文脈において、それぞれどの程度の出現度を示すかをコーパスを用いて調査する。以下、セクション２では使用するコーパスと検索対象となる構文について解説し、セクション３では検索結果を示し、それを様々な観点から分析する。セクション４ではまとめと今後発展させていくべき課題を記す。

2　コーパスの検索

2.1　コーパス

大津（2007, 2009）では話し言葉のコーパスとして、フィクションの会話部分や演劇を用いなければならなかったが、幸い現代英語では言語研究のために開発された話し言葉のコーパスが存在する。今回、アメリカ英語の話し言葉のコーパスとして選んだのは、現在編集中のAmerican National Corpus（ANC）に収録されているSwitchboard Corpus（以下Switchboard）である。

本体のANCが未完成で全面公開に至っていないためかSwitchboardを用いた研究は現在までのところあまり見られないので、このコーパスに関してここで少し解説しておきたい。ANCは後で紹介するBritish National Corpus（BNC）のアメリカ版として構築が開始されたものである。ANCの話し言葉の大きな部分をなすSwitchboardは1990年から1991年の間に録音されたアメリカ人の電話を通じた会話を文字化したものである。アメリカ合衆国全域に住む合計543人のボランティアが参加した約2,400回の会話からなり、語数にして約300万語となる。男女比は55％対45％、年齢層は20歳代から60歳代にわたり、学歴の高い話者が多い（大学卒業以上が約90％）。会話の録音は第三者が介在することなく、コンピューター制御によって自動的に行われたので、観察者を意識することのない自然な英語が記録されているという。ただし、あらかじめ定められた70のトピックから選んで会話することになっており、この点不自然さが残るとの批判もある。

イギリス英語の話し言葉のコーパスとして選んだのはBritish National Corpus（BNC）のspoken componentである。BNCについては各所で紹介されているのでここでは詳しくは述べないが、spoken componentは1991年から1993年にかけて録音された1,000万語からなる話し言葉のコーパスである。ANCのSwitchboardに比べBNCのspoken componentは大きさが3倍以上あることに加え、対面式の会話だけではなく講義、インタヴュー、政治家のスピーチなども含んでいる[2)]。

2.2 検索の方法

本稿の目的は、過去形と現在完了形が特に意味の変化なく交替可能な文脈において、それぞれどの程度の出現度を示すかを調査することである。よって、過去形と現在完了形が交替可能な文を探し出すことがコーパス検索の鍵となる。そのために、大津（2007, 2009）で既に行ってきたように、今回も現在とのつながり（present relevance）を持つ標識となる副詞3種類を選び、それぞれの副詞を含む文すべてを検索し、そののち手作業で文脈を吟味しながら過去形、現在完了形を抽出した。特に過去形の文を抽出する際には、これまでと同様に、現在完了形との交替の可能性が十分あるかどうかに細心の注意を払った。なお、3種類の副詞というのは、ひとつ目は上の（1）でDenisonが挙げている例文に見られる*yet*、二つ目は大津（2007, 2009）で用いた*ever*、三つ目は*already*である。*already*については、『ジーニアス英和大辞典』の語法解説に「完了時制で用いるのが原則であるが、〖米〗では代わりに過去形を用いることも多い」とあり、また、*Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*にも "Speakers of British English use **already** with a verb in a perfect tense ... Some speakers of American English use **already** with the simple past tense of the verb instead of a perfect tense"とあるので、こういった記述の検証を行いたい。

なお、検索に際しては、Switchboardについてはそれぞれの副詞をキーワードとしてコンコンダンサーのtxtanaを用いて300万語の全文検索を行い、検出された用例の中から手作業で該当する文あるいは節のみを抽出した。BNCのspoken componentは約1,000万語からなり、Switchboardの3.3倍の語数を有する。コーパスの構成あるいは検索ソフトの機能上、語数をSwitchboardの300万語に合わせて検索することは不可能であるため、BNCのspoken componentについてはコーパスに付属のSara-32によって上記三つの副詞をキーワードとして検索したのち、Switchboardでそれぞれの副詞について検出された用例数と同程度の用例数をランダムにダウンロードし、その中から該当する文あるいは節のみを抽出した[3)]。

3　分析

3.1　全体像

表１、２、３にそれぞれの副詞ごとに過去形、現在完了形の頻度をまとめた。まず、全体を通して言えることは、過去形の使用が先行研究の記述から予想していたほどSwitchboard（アメリカ英語）において多くないことである。もっとも過去形の頻度が高い場合でも*ever*を含む文または節の9.0％であり、*yet*を含む文または節においては0.4％で、上に挙げたDenisonの（１）の例にも関わらず、ほとんどないに等しい。

次にこれは先行研究から予想できたことであるが、BNC spoken（イギリス英語）においては過去形の比率がどの副詞においても非常に低い。イギリス英語の話し言葉では現在完了形が十分に浸透していると言える。なお、統計的には表１から３のすべてにおいてSwitchboardとBNC spokenの間に有意差はなく、アメリカ英語においても同様に現在完了形の高い浸透度を示していると言える。

イギリス英語の話し言葉における現在完了形の浸透度を大津（2007, 2009）と照らし合わせて歴史的に辿ってみると、三つの調査に共通して採用されている副詞*ever*を含む文または節での1600年代イギリス演劇における過去形の比率は92％、1800年代イギリス小説の会話部分における過去形の比率は59％、そして今回の調査では6.2％であることから、書き言葉のみならず話し言葉でも現在完了形が飛躍的に発達したことがわかる。アメリカ英語の話し言葉については歴史的なデータがないため歴史的な推移を確認することができないが、現在完了形はおそらくイギリス英語と並行した発達を遂げたものと推量される。

表１、２、３からもうひとつ言えることは、これは大津（2007, 2009）でも観察されたことであるが、副詞ごとに現在完了形の浸透度が違うことである。この点については、次のセクションで各副詞別に検討したい。

表1　*yet* を含む文または節

	過去形（a）	現在完了形(b)	合計（c）	比率(%) (a)/(c)
Switchboard	1	271	272	0.4
BNC spoken	1	248	249	0.4

表2　*ever* を含む文または節

	過去形（a）	現在完了形(b)	合計（c）	比率(%) (a)/(c)
Switchboard	51	522	573	9.0
BNC spoken	21	319	340	6.2

表3　*already* を含む文または節

	過去形（a）	現在完了形(b)	合計（c）	比率(%) (a)/(c)
Switchboard	7	95	102	6.8
BNC spoken	6	172	178	3.4

3.2　副詞別分析

3.2.1　*yet*の場合

既に見たとおり*yet*を含む文または節では、SwitchboardとBNC spokenのどちらにおいても過去形になることが極端に少なく、現在完了形がほぼ完全に浸透していると言える。これには否定文、疑問文の差がないが、*Collins English Usage for Learners*の*yet*の項には "Note that some American speakers use the simple past tense in questions like these. They say, for example, 'Did you have your lunch yet?' " とあり、Denisonと同じようにアメリカ英語では疑問文において過去形が使われる可能性があることを述べている。しかし、Switchboardの272例中29例の疑問文すべてにおいて現在完了形が用いられている。Denisonも*Collins English Usage for Learners*も「もう食べたか」という意味の過去形の例を挙げているが、下に示すSwitchboardで見つかった*eat*を使った3例はいずれも現在完了形であった。

（2）... have you eaten crawfish yet ...（sw 26/61）

（3）... have you not eaten yet tonight ...（sw 30/31）

（4）... have you uh eaten yet ...（sw 40/80）

*yet*を含む文または節で現在完了形がこのように発達した理由は、この副詞は英英辞典の定義に 'up to the present time' とあるように現時点での事情に焦点を置いていることに加えて、否定文、疑問文で用いられる副詞であることと深く関連していると思われる。つまり、*yet*を伴う否定文あるいは疑問文は、行為や出来事が現時点でまだ終わっていない、あるいは終わっているかどうか不明だという含みを持つのである。すなわち行為や出来事が過去のものになっていないので、現在とのつながり（present relevance）を示す現在完了形との相性がよいのは当然のことと言える。

さて、それでは1例ずつ見つかった過去形の例はどのようなものであるか見てみよう。

（5）... i don't think they really traded anybody that i know of yet i've i've got three kids who collect football cards ...（sw 43/35）

（6）I'm not sure that I actually learnt it at all yet.（BNC: KBF 7894）

興味深いことに、どちらの例においても否定辞*not*は主節に、*yet*は従属節に位置するのである。なぜこのような文で過去形が用いられるのかは現在のところ不明であるが、*not*は主節に、*yet*は従属節にというように節の境界をまたいでいることと深い関係があるものと思われる。英米のコーパスでそれぞれ唯一見つかった過去形の例が類似した形式をとることを偶然の産物とは片付けられないであろう。

3.2.2 *ever*の場合

既にセクション3.1において、*ever*を含む文または節については、歴史的に

辿ると現在完了形の勢力が話し言葉においても大きく伸びたことを見た。しかし、表からわかるように三つの副詞の中では英米どちらのコーパスにおいても過去形と共起する比率が最も高く、現在でも10%を少し下回る頻度で現れるのも事実である。以下にその実態を抽出された過去形の例文を精査しながら考察したい。

コーパスから抽出された例文を観察してまず気が付くのは、*ever*を伴う過去形の疑問文に対し、躊躇なく現在完了形で返答がなされているケースが複数見られ、過去形でありながら*ever*を伴う疑問文が現在とのつながり（present relevance）を持つ意味で解釈されていることがわかる。

（7）... what did did you ever try using like Prodigy or any of those systems ...
... no i haven't done that ...（sw 30/86）

（8）Did you ever go down the caverns?
No, no I've never been down and er they've always been full of water whenever I've been up around there.（BNC: K61（96））

次の例などでは過去形と現在形の両方で返答しており、上の２例と同じく*ever*を含む過去形の疑問文が現在とのつながり（present relevance）を保持していることを示している。

（9）Did you ever feel for Tybaot's death?
Of course I did he was my cousin. Of course I feel for him.（BNC: JK5（278））

他方、次のように同一話者の中あるいは話者間で過去形と現在完了形の間での迷いが見られる例も見つかる。

（10）... did you have you ever seen that that show ...（sw 23/12）

（11）Incidentally Janet, did your piece ever come back or erm ... .

Yes Oh, it's come back. Came back.（BNC: J9A（95））

（10）では最初は*did you*で文を始めていながら途中で*have you*に言い換えているのである。（11）は*ever*を伴う１番目の話者の文ではなく*Yes*で始まる２番目の話者の返答に注目されたい。*did you ever*で問われた質問に対し、最初は現在完了形で答えておいて、次に過去形に言い直している。このような揺れは言葉の変化の過程で起こりがちな現象であり、今まさに過去形と現在完了形が競合している様子の現れと解釈できる。

では、なぜ*ever*を含む文または節では*yet*に比べて過去形が使われる場合が今でも多いのだろうか。それは英英辞典の定義などで明らかなように*ever*は 'at any time in the past' とあるように過去において一度でもある行為や出来事があったかを問題にしているからであると思われる。つまり、*ever*は過去の一時点であることが起こったかどうかを問題にしているので過去形と共起しても違和感が生じない。過去の行為や出来事は現在とつながり（present relevance）を持つ場合もあれば持たない場合もあるが、持つ場合の過去形が現在完了形との交替を示しているのである。ちなみに次にあげる例文は現在とのつながりは念頭になく、過去にのみ関心がある場合である。

（12）... there was dust in the air during uh planting seasons and what not but uh that that was all we ever saw ...（sw 22/93）

（13）I mean he was doing that before we ever started audio description ...（BNC: F7C（1486））

これに対して例文（７）から（９）は現在にまで関心が及んでいるケースである。このような*ever*のあいまいさが過去形から現在進行形への移行を遅らせているものと思われる。

その意味的特性から、*ever*は現在とのつながりを持つ場合と持たない場合の可能性を常に合わせ持つものと思われるが、そのような特徴を持つ*ever*を

含む文または節において、現在完了形が今後どれだけの浸透を見せるか、将来的に興味深い調査対象となるだろう。

3.2.3 *already*を含む文または節

*already*に関してはセクション2.2で述べたように、『ジーニアス英和大辞典』や*Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*において、イギリス英語では完了時制を用いるのが原則であるが、アメリカ英語では過去形を使う話者もいる（または多い）、という旨の記載がある。表3から、確かにBNC spokenでは*already*が過去形と共起する比率は3.4％と非常に低いのに対して、Switchboardでは6.8％と*ever*の9.0％に近い比率で使われている。ただし、既に述べたとおり英米語で統計上の有意差はない。また、『ジーニアス英和大辞典』では「〖米〗では代わりに過去形を用いることも多い」とあるが、6.8％という数値は現在完了形がかなり浸透してきていることを示しており、「多い」という表現は誤解を生む恐れがある点に注意を喚起しておきたい。

では、*already*はなぜ*ever*と同じように過去形と共起する傾向を今なお残しているのだろうか。これは、*already*を再び英英辞典で調べると明快になるように、'before or by now, by this time' ということで、発話時点より以前にある行為や出来事があり、その影響が現在にまでつながっている意味合いがあるためである。よって、*ever*の場合と同様に過去形との高い親和性を持つのである。

以下に*already*が過去形と共起している例を検討していく。

(14) ... apparently they already they already caught him or they're talking about somebody else they're talking about two million dollar bond for somebody ... (sw 29/86)

(15) Erm I don't know if I said this already, in this interview, but ... (BNC spoken: GYK (409))

上の２例とも文脈から現在完了形と交替可能な過去形と判断したものである。(14) では 'apparently they already caught him' と過去形にはなっているが、'they're talking about somebody else they're talking about two million dollar bond for somebody' の部分から事件が現在進行形のもので、犯人が逮捕されたかどうかは発話時点の大きな関心事である。よってここで現在完了形が用いられていても不思議はないはずである。(15) についても、'in this interview' の部分からこの対話が現在進行しているもので、'I said this' の内容は現在の話題と関わりがあり、現在完了形に変えても違和感はない。実際、次の (16) のように似た状況で現在完了形が用いられている例もある。

(16) I do have a mandate as I already have said ... (BNC spoken: HVH (190))

前のセクションで*ever*を扱った際、「過去の行為や出来事は現在とつながり (present relevance) を持つ場合もあれば持たない場合もあるが、持つ場合の過去形が現在完了形との交替を示しているのである」と述べた。このセクションの*already*でも同じことが言えるが、交替が可能な場合、なぜ過去形が選ばれるのかについてはまだ触れていない。過去形から現在完了形への移行という歴史的流れの中で、過去形の使用は単に古い形式の生き残りと見てよいのか。それとも敢えて過去形を使用するのは何らかの意味が込められているのであろうか。次の例のように同一話者が同一発話内で同一内容の文を過去形と現在完了形とを交互に用いているところを見ると、過去形の使用に特別な意味合いはないように思われるが、この点についてはさらに詳しく検討する余地はあるだろう。また*ever*の場合と同じく、今後*already*についても (17) のような迷いが解消され、現在完了形がさらなる浸透を見せるのかも将来的に調査対象となるだろう。

(17) ... we already asked him about that actually. We we've already asked him he said yes. (BNC spoken: F8U (682))

4　まとめ

以上、現代英米語の話し言葉における過去形と現在完了形の交替について全体像と副詞別の傾向に分けて考察を行った。全体像から言えることは、BNC spoken（イギリス英語の話し言葉）では先行研究や辞書から窺えるように現在完了形が非常によく発達していることが検証された。他方、Switchboard（アメリカ英語の話し言葉）では先行研究などの記述から予想されるほど過去形は使用されておらず、統計的にはBNC spokenと有意差はなく、アメリカ英語の話し言葉でも現在完了形が十分に浸透していることが示唆される。大津（2007, 2009）において歴史的には書き言葉から広がったと考えられた現在完了形であるが、今日では話し言葉でも英米を問わず大きな発達を遂げているのである。ただ、その発達はもちろん一様なものではない。今回は副詞ごとの違いを見たが、*yet*ではほぼ完全に現在完了形が占めるのに対して、*ever*と*already*では過去形が数パーセントから10パーセント未満の比率で用いられるケースがあった。これは、両副詞の意味上の特徴から過去形が使用しうる余地があるためであると考えたが、どちらの副詞においても圧倒的に現在完了形が多数を占める以上、今後、過去形が淘汰されていくのか、あるいは生き残り続けるのか将来的な研究課題となる。

その他の今後の研究課題としては、アメリカ英語の話し言葉についてさらにコーパスの幅を広げての調査が必要である。今回使用したコーパスがイギリス英語ではBNCのspoken componentで、こちらは様々なタイプの話し言葉を収録しているのに対し、アメリカ英語の方はANCの中でもSwitchboard（電話を通しての会話）しか検索していない。Switchboardは観察者のいない自然で自発的（spontaneous）な話し言葉を表しているはずであるが、話し言葉のレジスターの一部に過ぎないのは事実である。今回の調査結果を検証する研究をぜひ近い将来に行いたい。

注

1）大津（2007: 6）では19世紀イギリス小説の「語り」の部分と「会話」の部分の現在完了形の比率が64％と41％。

2）ANCはBNCに匹敵するものとして編集が進められているのであるが、アメリカ英語の現状を反映させるのが第一義的な目的で、BNCとの比較、つまりイギリス英語との比較を念頭に置いてはいないため、このように一方（ANC）では電話による会話に、他方（BNC）では対面式の会話に重点を置いた編集というような相違が起きる。また、ANCが未完成のため、BNCには含まれているがANCには含まれていなレジスターの話し言葉のテキストがある。これらの理由から、細密な精度での英米語の比較はもとより困難であるため、今回の調査においては、英米語それぞれでの実態を大略的に明らかにすることを第一の目標として、比較は二次的なものに留める。

3）Switchboardで検出した用例数とBNCのspoken componentでダウンロードした用例数の比は次の通り。*yet*は914：900、*ever*は1,701：1,700、*already*は495：500である。これは英米語の比較を行う場合には必ずしも厳密な手法とは言えないが、注2に述べたとおり、主目的がアメリカ英語、イギリス英語内での実態を探ることで、両者の比較は二次的であるので大きな問題はないと思われる。

参考文献

American National Corpus. http://www.americannationalcorpus.org/

Austin, F.（2001）"Points of Modern English Usage." *English Studies* Vol. 82, No. 1: 80-84.

British National Corpus, World Edition（2000）. Oxford: The Humanities Computing Unit of Oxford University.

Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary new digital edition（2004）London: HarperCollins Publishers.

Collins COBUILD English Usage for Learners 2nd ed.（2004）London: HarperCollins Publishers.

Comrie, B.（1976）*Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Declerck, R.（1991）*Tense in English*. London: Routledge.

Denison, D.（1998）"Syntax." in S. Romaine,（ed.）, *The Cambridge History of the English Language*, Vol. IV. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 92-329.

Elsness, J. (1984) "The Preterite and the Perfect in BBC News Bulletins: the Case for a Text Linguistic Approach," in H. Ringbom and M. Rissanen, (eds.), *Proceedings from the Second Nordic Conference for English Studies*. Åbo: Åbo Akademi, pp. 159-71.

Elsness, J. (1989) "The English Present Perfect: Has It Seen Its Best Days?" in L. E. Breivik, A. Hill, and S. Johansson, (eds.), *Essays on English Language in Honour of Bertil Sundby*. Oslo: Novus, pp. 95-106.

Elsness, J. (1997) *The Perfect and the Preterite in Contemporary and Earlier English*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Jespersen (1909-49) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part IV. London: George Allen & Unwin Ltd.

小西友七, 南出康生 (2001)『ジーニアス英和大辞典』大修館書店

Leech, G. N. (1987) *Meaning and the English Verb*. Harlow: Longman.

大津智彦 (2007)「19世紀イギリス文学作品における過去形と現在完了形の交替 －*ever* を含む文または節を中心に－」『英語コーパス研究』, 第14号, pp. 1-16.

大津智彦 (2009)「1600年代イギリス文学作品における過去形と現在完了形の交替 －散文と演劇を比較して－」渡部眞一郎、細谷行輝編『英語フィロロジーとコーパス研究 今井光規教授古希記念論文集』松柏社, pp. 331-44.

Poutsma, H. (1926) *A Grammar of Late Modern English*, Part II, Section II. Groningen: P. Noordhoff.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman.

Switchboard. Retrieved May 9, 2009, from http://www.americannationalcorpus.org/OANC/index.html#

Vanneck, G (1958) "The Colloquial Preterite in Modern American English." *Word* 14: pp. 237-42.

Visser, F. Th. (1966) *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. II. Leiden: E. J. Brill.